

悩まなくてもだいじょうぶ



知っておきたい アレルギーの話

NPO法人アレルギーを考える母の会
代表 園部まり子



イラスト/清水直子

第1回

患者も賢く医療を見る目を持つ

❁ 体質はあっても症状なく 普通に暮らせる

皆様こんにちは。この連載では、

私の次男の経験や多くの保護者の悩みを出発点に、やがてアレルギーの専門医の先生方と連携するようになって見えてきたこと、つまり「アレルギー疾患はいまや適切な医療と自己管理のもとで、体質はあっても症状なく普通に暮らすことを目指せるようになった」ことをお伝えしたいと思っています。

「母の会」は1999年8月、夜間救急外来で親しくなったお母さん10人が集まり、横浜で発足しました。そして9年間の地域での活動を経て、少しでも社会的な責任を担えればとの思いで、昨年4月、NPO法人に

なりました。NPO発足記念の講演会には、思いもかけず(社)日本アレルギー学会理事長の西岡二馨先生も駆けつけてくださいました。

「母の会」の活動は、適切な医療に巡り合えず周囲の理解も得られずに孤立して苦しんでいる患者さんを守り、一日も早く健康を取り戻してもらうことに尽きます。年間400人(のべ2000件)近くから寄せられる相談を中心に、まず健康の回復、そして相談から浮かぶ学校などでの課題の解決に取り組んでいます。

❁ 選んだ病院によって

健康が左右されることも

かつて出会った患者さんにこんな方たちがいました。大病院に通っていたのに、喘息の発作で毎月のよ



そのべ・まりこ ● 神奈川県社会福祉協議会セルフヘルプ支援事業運営委員。困っている患者と専門医との橋渡しを第一に「治療ガイドライン」情報などの提供、専門医による講演会や会報発行、行政への働きかけを行なっている。共著に『食物アレルギーの手びき 改訂第2版』(南江堂刊)。

うに入退院を繰り返し、運動会や遠足はいつも不参加、夜間救急の常連になっていました。

ところがある時、その中の一人が病院を替わったのです。そうしたら2、3カ月で発作は起きなくなり、以後、入院することもなく普通の生活を取り戻しました。そしてそのことが話題になり、20人近くが病院を替わって健康を取り戻したというのです。そのとき私は、たまたま選んだ病院で子どもの健康や家族の生活が大きく左右されてしまうことがあると痛切に思いました。

これからの時代、患者も賢く医療を見る目を持つことが大事ではないでしょうか。そんな思いで書かせていただくコラムが皆様にとって少しでもお役に立てば幸いです。